

サイディア・フラハ 旅あるき 2026年1月 鈴木泉喜

サイディア・フラハで過ごした2週間ちょっとは、私にとって人生の糧と言って過言ではありません。もともとの目的は大学院の調査で、そちらに集中するつもりで行ったのですがケニアの人たちと楽しく過ごし、時にはちょっとしたトラブルにも直面しながら、あれこれ考える日々になってしまいました。

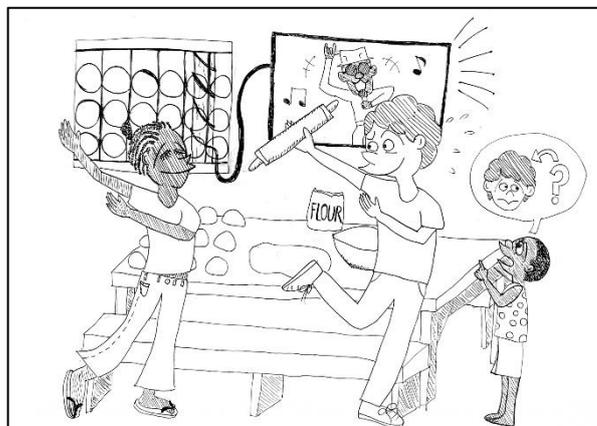
この拙文では、私がサイディアで感じたケニアの空気を、イラストや写真を交えながら皆様と共有できればと思います（なお本文中の人名の一部は仮名です）。お目だるい点もございましょうが、活動参加に先立つご参考にしていただければ幸いに存じます。



踊るチャパティ作り

ケニア人男性は側頭部を刈り上げたチリチリパーマが多く、私のようなふわっとした長髪パーマは、サイディア・フラハに暮らす少女たちは珍しかったようです。サイディアには小学生から高校生

まで6人の女の子が、寮母さんを入れて6人で一つの家族のように暮らしております。そんな輪の中に、奇妙な髪形の外国人男性である私がひょいと混ざり込んでしまったわけです。浮い



たり遠巻きにされるかと思いきや、初日から堂々と家族の輪に入れてもらい、政治について話し合ったりマンゴーを採ったり、まるで昔から居る者のように扱われました。優しい方々に囲まれ、なんともありがたい話であります。

距離がぐっと縮まったのは、チャパティ作りのときのダンスでした。テレビの音楽に合わせて彼女たちはしなやかに四肢を揺らし、身体でリズムを刻みます。長年ダンスをやっている私も混ざり込んでみた所、中学生がゲラゲラ笑いながら「そのステップできる?」「もう一回やって」とせがむのです。気づけばチャパティはそっちのけで踊り狂うわけですから、夕飯は遅れました。でも、そんな寄り道の時間の中で、私は知らず知らずにケニアの人々や空気を覚えていった気がします。何とも得難い学びでありました。

ご近所づきあい

滞在中、私は住込みスタッフ用の離れに部屋を借りておりまして、そこには二組のご近所さんがいました。まずはダグラス（仮名）一家。ダグラスはサイディアの用務員で、ビジターの世話も一手に引き受ける働き者です。学校設備の修理などの力仕事、ナイロビ観光の付き添い、送迎の手配に至るまで、これでもかと仕事をこなします。私も町や調査地へ出るときは彼を頼りにしておりました。彼が忙しいときでも「髪切りたいんだけど?」などと図々しいお願いをしてしまったのは、今でも申し訳なかったと思っております。



もう一人のご近所は、猫のプッシ
ー (Pussy は本名ではありませんが、
皆がそう呼んでいた)。灰色で
体格のよい甘えん坊で、朝に戸を開

けると必ず待っていて、すり寄ってご飯をねだります。昼は野原でひなたぼっこ。夕飯時には再度ねだりに来ます。またある晩、キッチンで何やらバリバリと食べる音がして、のぞくと彼は害虫を咀嚼していました。ぎょっとしましたが、これが猫の務めでもあるのだと納得しました。愛玩だけではない、互いに依存し合う暮らしぶりに、人と動物の古い付き合いを見た気がしました。

学校生活と社会課題

サイディアの学校では、私は“MOTO”と呼ばれておりました。スワヒリ語で MOTO は「炎・



熱いもの」の意味だそうで、覚えやすいそうです。授業には一生徒として混ぜてもらい、休み時間には一緒に踊り、リコーダーで国歌を吹いたりして、かなり長い時間を共にしました (左写真)。彼らは私を見つけると

「MOTO! 」と呼び駆け寄ってくれました。学年も男女も関係なく、何人もが私の腕を引

っ張って“Come To My Class”と言い私を取り合うものですから、その時ばかりは嬉しさ半分、困惑半分でした。

楽しい日々的一方で、先生や保護者からケニアの教育現場が抱える問題が聞かれました。体罰や学歴偏重、資金不足、児童の自尊心の低迷…。近年では指導方針や学校体系などが目まぐるしく変わる中で、子どもも保護者も教師も新制度に対応しきれず、昔ながらの方法や体制にすがらざるをえません。教育や他者理解を巡る悪循環が確かに存在します。

「障害」を巡る理想と現実

サイディアからバイクタクシーで20分ほど、サバンナのでこぼこ道を越えた所に Rare Gem Talent School (RGTS) という小中高一貫校があります(下写真)。この学校は、学習障害児が教育現場から脱落していく現状を問題視した人々により運営され、一般教育のほか絵や音楽など個別の技能教育を行います。このほか自閉症やADHD、知的障害者への支援も手厚く、「発達障害」を世間に定着させていった日本の取り組みとよく似ています。



RGTS はケニアにおける障害者への差別解消という理想を掲げ、国内外で高く評価されております。けれども、サイディアに子どもを通わせる母親は「普通の学校でもお金がかかるのに、special school なんて無理よ」と厳

しい意見を語りました。ケニアにおける教材や制服の負担は重く、RGTS 教師ですら「学費はかなりかかります」と率直に言うのですから、すべて児童を万遍なく...という実践はなかなか難しいです。差別解消という理想は大変有意義ですが、現実として、当面は多くの家庭にとって、それを問題と認め、対応する余裕すらないのでしょう。

キテングラという町

キテングラは 40 年ほど前にできた新しい街で、近くには EPJET という工業地帯もあり、そこで働く人々のベッタウンとしても機能します。正直、田舎の町ですので、人口はそこまで多くなく、これといった観光地はございませんでした。また 1 月は乾季の真っただ



中で、常に砂煙で霞がかかっています。それでも多くの商店や露天商が立ち並ぶ商人の町ですので、買い食いやショッピングは十分に楽しめ

ました。

またキテングラが位置する大地溝帯は人類が石器を使い始めた地の一部であり、古代の矢尻など石器があちこちに転がっているようです。荒川氏からそのことを聞いた私は、町

を歩くときは常に下を向き探し続けましたが、結局、素人には見分けがつきにくく見つけれず終いでした。下を向いた外国人が石を触っては捨てる姿は、地元民の目には奇異なものとして映っていたことでしょう。

キベラ・スラム



黄土色の地面はゴミと排泄物にまみれ異臭が漂う
キベラ・スラムは、ナイロビの市街地から徒歩2、
30分ほどで行けます。アテンダーとボディガードの
青年、もう一人の日本人ビジターとスラムに入った
私は、現金と携帯電話を守りつつ、黙々とその道を
歩き続けました。物乞いに出かける老婆、田舎から
都会に来たものの失敗しこの地に流れ着いた若者な

ど、住人たちは様々な事情を抱え暮らしています。

スラムのど真ん中には、地元民の生活排水やゴミで真っ黒に染まったナイロビ川が流れております（左写真）。」子どもたちは家から出た生ゴミやペットボトル等を橋の上から川に投げ込む遊びで競っていました。その様子を見ていた私は、「ちゃんと投げなよ、入らないよ」と言って子供たちがゴミを捨てる様子を面白がっておりました。「ポイ捨てはダメ」という普通の倫理観など、ギリギリの中を生きる彼らにとっては無価値であり、必要のないことなのです。これは覆しようのない事実でございます。

「ムズング」から見たケニア



ムズングとはスワヒリ語で「白人」を指す語です。滞在期間中、未就学児から中年男性に至るまで、「ムズング! 」と呼びかけられました。またそれと同じくらい中国人と勘違いされ話しかけられることも頻繁に

ありました。近年のケニアは中国と経済・技術分野で協力関係にあり、国内の中国人移住者は少なくありません。そのため私のようなアジア人は中国人に見えるようで、外を歩けばすぐにムズング / チャイナとしてグータッチを求められたり適当な似非中国語で話しかけられたりしました。ただし興味深いことに、そうした発言をする者は老いも若きも男性ばかりでした。

あるケニア人女性は、彼らが「フレンドリーな冗談」のつもりでこうした絡みをしてくと語っていましたが、真相は不明です。何にせよ、彼らから見れば私は余所者です。「フレンドリーな冗談」だけではなく、珍しい動物のように興味の対象として見ていたと思います。こちらが「日本人だよ? 」と言っても似非中国語を話し続けたのですから。とは言え、悪気のないのでしょう。彼らは純粋に、楽しんでいるのです。

最後に

今回の滞在では、考え方のギャップや生活習慣の違いには戸惑うこともあり、気丈にふるまってはいても、疲れがどっと来るときもありました。けれども、そのたびに手を差し伸べてくれる人々の優しさと、子どもたちのあっけらかんとした愛情に包まれて、豊かで美しい日々を送ることができました荒川さんをはじめサイディア・フラハのスタッフの皆さん、そして子どもたちに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

それから一つだけ誤解のないように言うと、私は自分を「ボランティア」とは思っておりません。ムズング（余所者）として、ある家族と学び舎にお邪魔して、一緒にご飯を作り、食べて、片づけて、学んで、遊んで—そんな毎日をただ楽しく過ごさせてもらっただけなのです。大事なのは、自分を迎えてくれた人たちとの時間を素直に楽しむこと。そうすれば、言葉の壁だって案外するりと越えてしまうものなのです。

